

---

someDAY ! ! !

くずりんご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

someDAY!!!

### 【Nコード】

N3263G

### 【作者名】

くずりんこ

### 【あらすじ】

突然目に入った黒板に書かれた愛の告白。いったい誰が書いたのか？すぐにクラスメートが自分が書いたと言って、屋上に呼び出されるが……

「バーカ」

空を見上げたまま、私はポツリと呟く。

「なんか言った？」

視界のギリギリ端に映る黒い髪がムツとしたように、それでも少し退屈そうに声を上げる。

「なんにも」

「嘘つくな。ちゃんと聞こえてたんだから」

私の隣で横になっていた親友は、腰を起こして私を見下ろした。

面倒くさそうに睨みつける彼女の顔は、同姓の私から見てもきれいだっただ。背の高くスレンダーな彼女のイメージ通り、少しつり気味の目も風になびいている長く伸ばした髪も、似合っていて少し嫉妬する。

「バカつてなによ」

「深い理由なんてないよ」

本当にきまぐれに言っただけだった。決して彼女に向けたわけではなく、強いて言うなら腹が立つほど広い空に向けたものだ。

そう言つと、彼女は「またわけのわかんないことを」とため息を吐いて、そのまま膝を抱いて体操座りをした。

彼女に向けていた視線を再び空に戻して、私は呟く。

「アズサちゃん」

彼女の名前を呼ぶ。たぶんきつと隣で面倒くさそうに顔をこちらに向けたんだろう。見えないけど雰囲気でわかった。

「私告白された」

そういつと、雰囲気ガラリと変わった気がした。数秒後にそれが気のせいだけじゃないと証明された。アズサちゃんの細い腕が私の襟を掴んで無理やり、座らされたからだ。顔を見るとアズサちゃん

んは真剣にこちらを見ていた。

「マジ?」

「マジマジ超マジ」

「からかっているんじゃない?」

「真面目だよ。証拠だってあるんだから」

ほらつと携帯電話の液晶画面をみせると、アズサちゃんはたちまち複雑そうな顔つきになった。

例えるならUFOを見たのは良いけど、それが実は精巧に作られた張りぼてでした。なんてネタバラシされたときのような、そんな顔。

まあそんな顔されるのもわかるんだけど。

最近の携帯電話では当たり前になった大きな液晶のには、教室の黒板が書かれている。そこにはでかかと「三嶋ヤヨイさんが好きだ!」と書かれていた。

無駄に高画質なせいできれいに塗られた色とりどりのチョークの色が映える。

ちなみに三嶋ヤヨイとは、私の名前だ。

「ふざけてるんじゃないの」

「ふざけてない」

「いや。あんたじゃなくて」

眉間のしわを揉み解しながら、アズサちゃんは言う。

「これを書いたやつ」

「そんなことない。だってビックリマークだつてつけてるんだよ」

私が立ち上がって言うと、アズサちゃんはまたため息を吐く。

「犯人を知ってるの?」

「それが全然。朝一番に来てみたらこれが書いてあった」

二人の間に微妙な沈黙が流れる。その沈黙を邪魔するかのようによ、予鈴がすぐ近くのスピーカーから聞こえてきた。

私達は飛び上がって時計を見た。授業が始まる五分前だ。

弁当箱を拾うと、駆け出す。今私達がいるのが屋上で、クラスは一階。走らないと間に合わない。

「ほら行くよ」

先を走るアズサちゃんのムコウに大きな入道雲がもくもくと山の上から湧き出していた。

今日の授業の終わりを告げるチャイムが鳴って、みんなが一気に前後左右の人と話し出す。そうでない人は早々と鞆に荷物を入れていた。

そんなみんなを私は一番後ろの席で、頬杖を付いたままぼんやりと見ていた。最後列の窓際。最高の位置だがこの季節は西日がきつい。さらに暑いからって、窓を開けっぱなしだからカーテンが私の横で風に煽られて踊るから、余計に邪魔だ。

「ヤヨイ、ヤヨイってば」

通路側を向くとアズサちゃんが立っている。その横には一人の男子生徒が立っている。長身のさっぱりした髪型の男子生徒が立っていた。なぜか顔がこわばっている。

「連れてきたよ」

こっそりと耳打ちするアズサちゃんに、私は思わず同じように「何？」と耳打ちし返した。

「黒板の彼よ。三組の江草ダイスケくん。むこうから私に話してくれたの」

「江草ダイスケ、くん」

ちらりと見上げると、ダイスケくんはわざとらしく私の向こう側にある窓の外を見ていた。ダイスケくんは一年と二年のとき同じクラスだった。何度も話したこともあるし、知らない仲じゃない。でも……。

「困るよいきなり」

「告白はいつもいきなりなものよ」

うまいこと言ったつもりなのかアズサちゃんは軽くウインクする。

こんなに上機嫌のアズサちゃんは中々見られない。きっと今の状況を楽しんでいるのだろう。

「私こんなの初めてだし」

「だからいいじゃない。断る気なの？」

そういうことじゃないけど。と唇を尖らす私の頭をアズサちゃんはポンポンと叩き、江草くんのほうを見る。

「それじゃ邪魔者はこの辺で」

なんて言いながら、ひらりときびすを返し、去っていく。かわいそうなほど固まったままの男女二人を残したまま。

教室の扉から出て行く背中を恨めしそうに睨みつけていた私の頭上から、戸惑い気味のダイスケくんの声が降ってきた。

「あのさ。三嶋さん」

「は、はい」

思わず大きな声を上げた私に、ダイスケくんは驚いたように瞳を大きくしたが、すぐに笑みを浮かべて、柔らかな声を私にかけた。

「そういうことだから、ちょっと屋上に来てくれないかな」

私はぎこちなく、頷いた。

放課後の屋上はどことなく寂しい。ムカつくほど広がったはずの空も、今では両手を空に掲げてみれば端っこがつかめるくらいに小さくなっていく気がした。

今隣にいる人がアズサちゃんならきつと私は、思いのまま思い切り手を広げていただろうがさすがにダイスケくんの前では出来ない。こっちこっちと手招きするダイスケくんのところへ歩いていく。

転落防止用の高いフェンスにしがみついて、ダイスケくんは外を見ていた。

「俺ここはじめて来たよ。スゲー気持ちいいな」

「そ、そうだね」

頭二つ高いダイスケくんをチラリと見上げて、すぐに前を向いた。

緑色の四角形の細い針金に区切られた風景は、夕日に紅く染められていた。

妙に高鳴る胸が不安になる。何度も言うが私はこんな体験初めてなのだ。しかもなかなか特殊な状況だ。

「江草くん。江草くんはどうして黒板にあんなこと書いたの」

「ああ、だつてあの日三嶋さん日直だつただる。だから早く来るのわかつてたんだ。ごめん気持ち悪かった？」

「そんなことない」

首を振つて私は呟く。胸が痛くて前を向けなかった。だからダイスケくんがどんな表情をしているのかわからなかった。

フェンスに寄りかかつて、座るダイスケくんは頭の後ろに腕を回す。

「そつかそつか。よかつた」

その口調が少しおかしかったことに、私は気づく。その気持ちを押し殺したまま、私は彼の横に同じように座つた。

「三嶋さんにはよくお世話になつたよ。ほら、ノートも貸してもらつてたし」

「お互い様だよ。私もよく借りてた」

顔を合わさず、私達は話した。今、彼と私の視線が合わさつてたらどうしようかとぼんやりと考えたが、口はまったく別の動きをしていた。

「私の、どんなところが好きなの？ チビだし、運動音痴だし」

「そんなところが好きなんだ」

江草くんは私の言葉に被せるように言った。

「おもしろいし、近くにいて飽きないと思つたからさ」

涙がこぼれそうになつた。顔が真っ赤になつたのは多分ばれていないだろう。

私も好きだ。と言いたかつた。

でも言えないんだ。

だって私達は多分嘘を付き合って、ここにいるんだから。

だから好きの代わりに言葉をぎこちなく紡いだ。

「もういいよ。ごめんね」

「え？」

「もう十分」

思い切ってダイスケくんの方を向く。間の抜けた顔が妙にかわいかった。

「江草くんのメッセージの相手私じゃないもん」

ダイスケくんは押し黙ったまま、下を向く。私達の長く伸びた影は、行き場を失って慌てているような気がした。

「あの日の日直。私じゃないもん」

「……」

そう。全部私の悪ふざけだった。軽い冗談のつもりだった。

「日直は、アズサちゃんだもんね」

江草くんは何も言わなかった。

日直は早く来て学級日誌等を書かないといけないので、大体の人は一番に学校に来て終わらすことが多い。アズサちゃんもそのつもりで私も付き添いの約束をしていた。ダイスケくんの予定もそのつもりだったのだろう。

私が一人で一番に来たのはアズサちゃんがその日風邪をこじらせて、代わりに日直の仕事をするつもりだったからだ。

黒板に「宇野アズサが好きだ」と書いていたダイスケくんは校門をくぐってくるのが私一人だということに焦ったのだろう。だからアズサちゃんの名前だけ消して逃げ出したのだ。

そう。本当は私が教室に入ったときに名前の部分が消えていて「が好きだ！」しか残っていなかったのだ。

そこに自分の名前を書き込んだのはほんのいたずら目的で、写真を撮ってアズサに見せたのはモテるアズサへの当てつけのつもりだ

ったのだ。

「ほんと、ごめんね。嘘つかして」

多分引つ込みの付かなくなったか、ほんとに告白しようとしてアズサちゃんのところへ行つたダイスケくんをアズサちゃんが勘違いして引つ張り込んだのだろう。

その結果が、こんな嘘を彼につかせてしまっている。ものすごく悪いことをしたようで、私は立ち上がって頭を下げた。

「ほんとにほんとにごめんなさい」

金網が揺れる音で、ダイスケくんが立ち上がったことがわかった。ところどころ剥げたタイルを伸びる影が、不意に重なった。彼が私の頭を優しく叩いたのだ。

「なんか、すごいことになってたんだな」

恐る恐る顔を上げると、彼は困つたように笑っていた。

「俺が悪いよ。元はといえば普通に告白してればこんなことにならなかった」

唇をかみ締める。自分のせいなのにすごく胸が苦しかった。

「はつきり言つてれば良かったんだ」

「……」

「俺は三嶋さんが好きだ」

は？ と思わずこけそうになるのをぐっと堪えて、代わりにダイスケくんをものすごい勢いで見た。

「あのさ、あの朝本当に三嶋さんの名前を書いてたんだ。そのことを宇野さんも知ってた。だからあの日協力するってんで休んでもらってたんだ」

頭の中が真っ白にショートしている。ただダイスケくんの頬がみるみる赤くなるのは夕日のせいじゃないということにはわかった。

「でも実際に書いてみては良いけど怖くなって逃げ出した。宇野さんにはすごく怒られたけど、今日になって黒板にちゃんと書かれてるって言われて、チャンスだと思って来たわけさ」

めんどくさい男でごめんね。と頭を掻きながら言つと、急に真面目な顔をしたダイスケくんは私を見つめた。

「でも本当に嘘でも冗談でもなくて、好きだ」

顔が爆発するかと思つた。照れと恥ずかしさが混ざつた暖色系のグラデーションが身も心も染めてしまったような気がした。勘違いも嘘も、全部吹っ飛んでしまつて残つたのはそんな感情だけ。

「私も、好きでした」

うつむいて消えそうな声で告げる。それ以上何もいえない。ダイスケくんも何も言つてこなかった。

数分が過ぎて、火照つた空気の中「帰ろつか」と言つたダイスケくんにも小さく頷くと、一緒に歩き始めた。

十二歩目で自然につながれた手のひらは、意外にも冷たくて気持ち良かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3263g/>

---

someDAY!!!

2010年10月8日15時21分発行